

## シンポジウム

## 「World Englishes時代の英語コミュニケーション」

## 第17回 年次大会シンポジウム

2008年10月11日

(会場) 大阪商業大学

コーディネーター

小倉 慶 郎

(大阪府立大学)

英語は、異文化コミュニケーションのツールとして大きな役割を果たしている。しかしながら、一口に英語といっても、世界では様々な英語が使われており、World Englishesと複数形で使用する機会が増えている。World Englishesとは、それぞれの国や地域の事情を反映し多様化した「世界諸英語」という意味である。

2008年に発刊された『ダボス会議で聞く世界の英語』（コスモピア）によれば、世界である程度英語を使いこなすことができる人口は約15億人という。そのうちネイティブ・スピーカー（英語を母国語とする人たち）は約4億人にすぎない。つまり、英語使用人口は、ネイティブ・スピーカーよりも、ノンネイティブ・スピーカーの方が圧倒的に多いのである。

毎年スイスで開かれている世界経済フォーラム、ダボス会議では、アジア英語、アフリカ・中東英語、ヨーロッパ英語（ドイツ、フランス、イタリア）、ロシア英語など多種多様な英語が飛び交う。これはビジネスの世界で、いかにWorld Englishesが使われているかという事実を如実に示しているものといえよう。

学術の世界でも多種多様な英語の存在権を認める運動が活発になってきている。事実、International Association of World Englishes (IAWE) という国際学会が存在する。学会ホームページによれば、World Englishesという概念は、Braj B. Kachru（ブラジ・カチュル、インドの北西部カシミール地方出身の言語学者、イリノイ大学教授）が、“The Indianness in Indian English”（1965）という論文でインド英語の特徴を主張した時まで遡るといふ。カチュル氏のウェブサイトによれば、彼がWorld Englishesという用語を造った（In the early 1980s he coined the term and philosophy for which he is most famous: “world Englishes.”）。1981年にはカチュル氏が中心となり「World Englishes」というジャーナルが創刊され、1998年には、本名信行氏を編集長として「Asian Englishes」（「アジアにおける英語の普及と変容を社会言語学的に考察する国際学術専門誌」）が創刊された。

ところで、わが国の英語教育では、戦前はイギリス英語、戦後はアメリカ英語を規範としてきた。いまだに、「イギリス英語・アメリカ英語以外は英語教育の模範とすべきではない」という声も根強くある。しかし、国際コミュニケーション英語力を測るテスト、TOEICは2006年にリニューアルされ、リスニングで英米以外の英語も使用されるようになった。新TOEICテストでは、世界では様々な国や地域で英語が使われている現状を考慮し、米国・英国・カナダ・オーストラリア（ニュージーランドを含む）という、英語を

公用語としている国々の4種類の発音が導入された。また英語圏の大学留学のために使われるTOEFLテストでも、変革が行われている。日本では2006年から新形式TOEFL iBTが導入されたが、そのリスニングで、アメリカ英語以外の多様な英語が聞かれるようになった。クラスでの留学生の発言には、彼らの出身国や地域特有のアクセントが入る場合があり、また「講義」の1つではイギリス英語やオーストラリア英語が聞かれる場合がある。このように、国際的な英語テストでも多様な英語が使われ、World Englishesが存在権を主張し始めているのである。

本シンポジウムでは、同時通訳、社会言語学、英語教育の分野で、第一線で活躍している専門家をパネリストとしてお招きし、同時通訳の現場、マレーシア英語の観点、日本の英語教育の立場からそれぞれWorld Englishesについて語っていただいた。本シンポジウムは、World Englishesを理解し、議論するまたとない機会となったと考えている。